# 修養会を覚えての全校礼拝⑥

（高校三年生による礼拝）

聖書箇所：ローマの信徒への手紙12：15
“喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。”
――――

今年も残すところあと2ヶ月です。新しい学年になってもう11月と感じている人と、まだ11月なのかと感じている人がいると思います。感じ方は、人それぞれ違うけれど、私は4月から、今までの高校三年生の生活を過ごして、もう既にとても印象深いものになったと感じています。

高校三年生の生活は、1日1日が捜真生活の最後です。だから、私はこの1年を毎日楽しく過ごすことを目標にしています。私にとって、これまでの生活で一番濃い思い出は、5月に行われた自然教室です。6月の合唱コンクールや、9月の文化祭、つい先週行われた体育祭。どれも、比べられないほど素敵な思い出を作ることが出来ました。それでも、私が自然教室をあげる理由は、キャンドルライトサービスがあったからです。キャンドルライトサービスでは、4人の友達が話してくれました。どの話もとても心に刺さりました。今でも忘れられません。その4人の話には共通するキーワードの様なものがあるように感じました。それは友達の存在です。辛い時の友達の存在がどれだけ大きいかを改めて実感したお話でした。

私がいちばん辛かった時はいつかと考えると、一つすぐに思い浮かんだ事がありました。私は英語が好きです。特に話すのが好きです。オーストラリア短期研修に行ったのも、たとえ文法がごちゃごちゃでも、とにかく英語で人とコミュニケーションを取りたかったことが第1の目的でした。そんな私を英語を好きにさせてくれた、先生がいました。

その先生は、私が小学6年生の3月頃から、私の家の近所で英語を教えてくれました。先生は、50代で少しぽっちゃりしていて、パワフルな先生です。当時の私はアルファベットの書き方も適当だったので、その先生が一から英語の基礎を叩き込んでくれました。4月に中学にあがって、本格的な授業が始まっても、先生のお陰でずーっと

英語が好きなままでいれました。しかし、中学三年生頃のこと、先生が急に英語教室を畳むことになってしまいました。当時の私はその理由を知りませんでした。

月日は流れ、高校1年生の10月に、兄の携帯に1本の電話がかかってきました。兄が知らない番号だったので、母が調べてみると、英語の先生の電話番号でした。兄は私と同じようにその先生に英語を習っていましたが、私よりも前にやめていました。もし何か連絡があるならば、母か私の携帯に電話がかかってくると思っていたので、不思議に思っていました。そこで、私の携帯から折り返し電話をかけてみました。電話の向こうから、先生の声が聞こえたように感じました。しかしそれは、先生の姪っ子さんでした。「なぜだろう。」と疑問に思ってる私に、姪っ子さんは、先生が病気で亡くなってしまったことを伝えてくれました。英語教室を畳む時には、先生は既に自分の今後はわかっていたようです。

私は、頭が真っ白になってしまいました。母に電話をかわり、葬儀などの詳細を聞いているのを、母の横で泣きながら聞いていました。葬儀の日、しっかり今までの感謝を伝えたかったけれど、私はずっと寝ている様な先生に近づくことが出来ませんでした。近付こうと思っても、足が言うことを聞きませんでした。顔を見たかったけれど、それも出来ませんでした。ただ、あのぽっちゃりした先生が、別人のように細くなってしまった身体が少しだけ見えたことをずっと覚えています。次の日からは、親戚のお葬式と法事が2日間続きました。3日連続でご不幸に関わることは人生で1番辛いものになったなと思いました。さらに10月ということもあり、中間試験も被っていて、テスト勉強もしなくてはいけませんでした。英語の勉強をする時は、思い出したくなくても、先生の存在が思い出されてしまい、私の精神状態は最悪でした。

そんな時に助けてくれたのは、友達でした。私には勿体ないくらい、私の周りには素敵すぎる友達が多くいます。何かあればすぐに駆けつけてくれて、相談にのってくれて、支えてくれます。もちろん友達だけ

ではなく、先輩〜っと声をかけてくれる後輩、どんな話でも聞いてくれる先生もいます。

自然教室のキャンドルライトサービスの後、中学一年生の時からずっと仲の良い2人の友達が、急に私を呼び出しました。日野ホールの前の廊下で3人で話しました。2人が急に、「出会ってくれて友達になってくれてありがとう。」と照れながら、私に伝えてくれました。もちろん私は、急にこんなことを言われるとは思ってなかったので、大号泣でした。二人と友達でいられることの幸せを改めて実感しました。友達の存在は不思議なもので、家族とは違う感覚で、何年たっても一緒に居たいと思えます。

キャンドルライトサービスで話してくれた4人の話は、照れくさくて普段言えない事を友達に伝える機会を私たちに与えてくれました。それと同時に、改めて友達の存在の偉大さを感じさせてくれました。4人だけではなく、自然教室で関わってくれた、友達と先生方には感謝しています。76回生で良かったと思える最後の自然教室でした。

皆さんは、普段から友達や家族、先生に感謝を伝えられていますか？感謝したいと思っていても、ある日突然それが出来なくなる日が来るかもしれません。だから、私は感謝したいと思った時に、ありがとうと感謝を常に伝えられる人になりたいと思います。

（高校三年生による全校礼拝より）